

## 第7回持続可能性ディスカッショングループ

日時：平成27年9月29日（金）10時2分～11時54分

場所：虎ノ門ヒルズ9階 Tokyo

○田中持続可能性部長 小宮山先生がまだお着きになられていないようですが、先に始めたいと思います。皆様、本日は御多用の中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

定刻になりましたので、第7回持続可能性ディスカッショングループを開催いたします。

まず初めに、井上局長のほうから御挨拶させていただきます。

○井上大会準備運営第一局長 おはようございます。大会準備運営第一局長の井上でございますけれども、本日はお忙しい中、第7回になりますけれども、持続可能性のディスカッショングループDGにお集まりいただきましてありがとうございます。座って述べさせていただきます。

東京2020大会まで3年を切ったということで、この夏がちょうど3年前ということだったわけでございますけれども、大会の準備状況につきましても、さまざま注目をいただいているような状況になってきております。

現在の準備状況全般につきましては、IOC、IPCのほうにも御報告をしながら進めているところでございますけれども、ちょうど今月リマ、そしてアブダビのほうで、IOC、IPCの総会がそれぞれ行われました。その総会におきましては、非常にまあ順調であるという高い評価を得ているところでありますけれども、まだまだ手がついていない部分、あるいは当初の予定よりも遅れぎみという部分も、中にはあるわけございまして、気を引き締めてしっかりと準備を進めていかないといけないということを、また組織委員会内部でも、意識を新たにしたところでございます。

中でも、大会運営に当たりまして、持続可能性への配慮という点につきましては、準備が本格化し始めております。各自主部門、52のFAがございまして、それぞれの部門におきまして、それぞれの計画に反映をして、それが全体に行き渡るようなことをする必要がございますので、この持続可能性の分野につきましては、先行して計画策定の作業を行っているというような状況でございます。

先生方には御案内のとおり、来年の3月を目途といたしまして、この持続可能性に関す

る運営計画の第二版バージョン2を策定・公表することとしております。7月に開催をさせていただきました街づくり・持続可能性委員会では、第二版の策定の方向性について、御議論いただいたところでございます。

この東京大会の、持続可能性の配慮の具体化に向けまして、二つのワーキンググループ、低炭素と資源管理のほうのワーキンググループでも、非常に精力的に御検討をいただいているところでございますけれども、本日は、その2分野プラス残りの3分野、大気・水・緑・生物多様性等の分野と、そして人権・労働・公正な事業慣行等の分野、そして参画協働・情報発信と、この3分野を含めました主要5テーマごとに、対策をどのような目標でやっていくのか、そして、その目標達成に向けた具体的な施策について、どうあるべきかを御議論いただきたいと考えてございます。IOCの持続可能性の担当のほうからも、第二版バージョン2は、さらに具体的に、数値も入れた形で考えていきたいと思いますよという形でいただいておりますけれども、本日は、そのような点につきましても、忌憚のない御意見を頂戴できればと考えてございます。御審議のほど、よろしくお願い申し上げます。

小宮山先生、ちょっと始めさせていただいております。失礼いたしました。ありがとうございます。

○田中持続可能性部長 ありがとうございます。なお、このディスカッショングループは、メディアの皆様にも公開とさせていただいております。カメラ・スチールの皆様は冒頭撮影のみとさせていただいておりますが、ペン記者の皆様は会議傍聴可能とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

また、本日は、高座長初め総勢7人の委員に加えまして、小宮山委員長、国及び東京都から御出席いただいております。それでは、プレスの皆様、冒頭撮影はここまでとなりますのでよろしくお願いいたします。

それでは、以降の議事進行につきましては、高座長にお願いいたします。

○高座長 それでは、議事を進行させていただきます。本日の進め方につきましては、最初に事務局から説明をお願いいたします。

○田中持続可能性部長 まず事務局のほうから議事次第について御説明いたします。まず、お手元の持続可能性ディスカッショングループ議事次第をご覧くださいと思います。

本日は「持続可能性に配慮した運営計画 第二版」の策定について、これまでの低炭素ワーキンググループ及び資源管理ワーキンググループでの検討状況を、低炭素ワーキング

グループに関しては枝廣委員より、資源管理ワーキンググループにつきましては崎田座長より御報告をいただきながら、各主要テーマの大目標（案）、それと計画全体の構成（案）、それと各主要テーマの具体的施策（案）について、事務局より説明させていただきます。委員の皆様には御議論いただきたいと思いますと考えております。

以上が、議事次第になります。

○高座長 それでは、議事に入ります。まず、資料がたくさんございますけども、この資料全体についての説明をお願いいたします。

○林持続可能性企画課長 それでは、資料2のほうをご覧くださいませでしょうか。1ページ目に、本日の報告・審議事項、先ほどと若干重なる部分がございますが、記載させていただいています。まず冒頭、低炭素WG・資源管理WGでの検討状況について、資料に基づいて、事務局から説明させていただきつつ、先生から御報告させていただきます。その後、審議事項ということで、各主要テーマの大目標について、何を掲げていくべきか、またゴールに向けてどのような個別目標を定めるか、また計画全体の構成、さらには目標達成に向けて実施すべき施策について、本日は審議していただこうと考えております。

以上です。

○高座長 それでは、まず資料に基づきまして、事務局から概要を説明していただいた上で、この全体のですね、その後に枝廣委員のほうから御報告をお願いしたいと、こういう流れでよろしいですか。

○山下持続可能性計画課長 それでは、資料2の2ページを御確認ください。一つ目としまして、低炭素WG・資源管理WGでの検討状況報告ということで、まず共通しまして、目標設定のフレームというところになりますけれども、7月の持続可能性委員会のほうでも第二版に向けた骨子のほうを御説明させていただいておりますけれども、まずはSDGsへの貢献というところを一つ念頭に置いてございます。SDGsのフレームに従う形で、第二版におきましても、ゴール、各分野における全体的な戦略の方向性、そして目標、各分野の各項目におけるターゲット、そして、その目標に対する進捗を管理するための測定方法や数値ということで指標、インディケーターと、こういった構成を踏まえていきたいというふうに考えてございます。

それでは、おめくりいただきまして、3ページ目の低炭素WGの検討状況について、御説明いたします。本年7月20日及び9月12日に開催をしております。7月20日におきましては、気候変動に関する全体のスキーム、カーボンフットプリントの全体像、気候変動に関する

目標と対策というところから討議をいただいております。続きまして、9月12日におきましては、それらの対策を行っても出てしまうCO2に対するオフセットということに関する方向性について、御議論をいただいたところでございます。なお、ワーキングの資料につきましては、参考資料ということで、お手元のほうに、後ろのほうにつけさせていただいてございます。

4ページ目にまいりますけれども、気候変動分野の大目標（ゴール）というところで、東京大会のゴールとしましては、「Zero Carbon」というところでどうかというところを、低炭素ワーキングの中では議論させていただいてございます。考え方といたしましては、パリ協定が2020年に発行すると、2020年からスタートしていくというところで、世界が脱炭素社会を目指す中で、東京大会もそのタイミングに一致しているところがございますので、その方向性、戦略というところを大会で示しながら、脱炭素化の礎を築くという考え方に基づいて、こういったゴールではどうかというところを議論させていただいてございます。なお、ワーキングの中でも議論がございましたけれども、今まで低炭素ワーキングと申し上げておりましたが、方向性を合わせまして、「脱炭素ワーキング」というところに名称も変更していきたいというふうに考えてございます。

5ページ目に移りまして、気候変動分野の目標設定に向けてというところで、大きくどういうふうに進めていくかというところが3項目ございます。まずは、気候変動についてのカーボンマネジメントの体制をしっかりと構築して、排出量の管理であったり、削減活動の推進というところを進めることが、まず体制のガバナンスをつくっていくというところが、まずは重要というふうに考えております。それに基づきまして、二つ目として、さまざまな排出の削減活動を各機能で行っていくというところ。三つ目としましては、そういった削減活動を行っても出るCO2に対してオフセットをどういうふうにしていくのかというところが、目標設定に向けた骨子というところというふうに考えてございます。

上記1～3のところを進めていくことによって、ゼロカーボンという大目標のゴールを目指したいというふうに考えてございます。

事務局からは、簡潔ですけれども、御説明は以上になります。

○枝廣委員 ありがとうございます。低炭素ワーキンググループの枝廣です。

今、事務局から御報告をいただいたような形で検討してきております。今の資料で、4ページを見ていただきたいのですが、ゼロカーボンを目指すということをはっきりと打ち出そうと考えております。それに従ってワーキングの名称も低炭素ではなくて「脱炭素」に

するのはいかがでしょうか。これ議論したときに、この2年間で本当に大きく変わってきたなと思います。そうなったらいいなと2年前も思っていたのですが、今は時代のほうが追いついてきているか、追い越していったような気がしております。そうした感じで言いますと、さらに今後3年の間に世界もまだまだ進んでいくと思うのですね。ますます温暖化の影響が顕在化するでしょうし、いろいろな取組が進んでいく。そのときに、東京五輪がその先導を切ってリードしていくような立場を保たないといけないと考えています。この「ゼロカーボン」という言葉はいろいろな解釈があると思いますが、ここでは、パリ協定に則って、いずれゼロに近づけていく意味です。2020年の東京五輪でゼロにすることは不可能だと思いますが、もう少し長い時間軸でいずれゼロにしていく、その途上に東京五輪を位置づけるということで考えております。

5ページのオフセットについてですが、順番としてはまずできるだけ減らし、それでもどうしても出されるものについてはオフセットをします。オフセットのクレジットについても、私たちのワーキングでかなり綿密な議論をしておりますが、オフセットの種類もいろいろとありますので、例えば検証がどれくらいしっかりされているかなど、パリ協定のルールに則り、世界に恥じない形でオフセットのクレジットをきちっと位置づけて考えて使っていきたいと思っています。

ワーキングの名前そのものも変えるという大きな位置づけになりますが、このような形で進められればと思います。以上です。

○高座長 ありがとうございます。

いいですね。名称の変更。何か熱意が感じられますね。

では、続きまして、資源管理ワーキンググループの報告に移ります。資料に基づきまして、最初に事務局から概要を説明していただいて、その後、崎田座長のほうから説明をお願いいたします。

○山下持続可能性計画課長 資料2の6ページ目を御確認ください。資源管理WGの検討状況ということで、本年2017年度につきましては、5月8日、5月22日、8月8日、9月5日に開催しております。5月につきましては、主に飲食提供に係るテーマというところで議論を進めさせていただきました。8月に入りまして、資源管理の全体のスキーム、目標設定のあり方等につきましては、議論を進めてきているところでございます。

めぐりいただきまして、7ページ目でございますけれども、資源管理分野のゴールというところで、立候補ファイルにおいて「Zero Wasting」というところでございましたけれど

も、「Waste」という言葉には3Rというところだけではなくて、動詞としましては、浪費とか、あとは土地が荒れ果てるとか、そういった意味も含めてございます。Zero Wastingということによりまして、そういった廃棄物の3Rだけではなくて、資源を循環させていく、また土地が荒れ果てるようなところを防いでいくという意味では、生物多様性等との関連性もつなげられると、そういった観点も踏まえまして、こういったゴールではどうかという議論をさせていただいております。このゴールの考え方としましては、SDGsの目標12にある「持続可能な消費と生産」、またサーキュラーエコノミーというところを踏まえつつ、というところがございます。また、二つ目のところになりますけれども、大会に関わる資源を生かし切ると、そして循環型の資源の利用であったり、効率的な利用、また使った後は有効に活用していくと、そういったところを含めた言葉というふうに考えております。資源だけに限らず、脱炭素社会、また自然と共生する社会というところにもリンクがあると思いますので、持続可能な社会への変革の推進力となる取組を進めていくと、そういった思いでゴールを掲げているというところがございます。

次の8ページ目に移らせていただきまして、資源管理分野の目標の枠組みの案というところがございます。ここでは、資源管理分野でどういった目標の枠組みであるべきかというようなところを議論をいただいているところがございます。目標の視点としましては、3Rのリデュース、リユース、リサイクルというところと、地球環境保全の側面というような四つの行のところと、大会に使う資源としてのインプット側のお話と、大会で使った後のものをどうするかというアウトプット側の視点と、こういった象限で検討を整理してきてございます。

表の右側のほうには目標の候補というところで、それぞれ挙げておりますけれども、リデュースであればロスの削減というところ、リユースのところでは、大会に調達してくる物品のリース等を含めた再使用・再生利用というところであったり、再生材の利用、また既に進めております入賞メダルの再生金属利用というところと、右のほうにまいりますけれども、運営から出てくる廃棄物であったり、食品廃棄物、建設廃棄物等もしっかり再生利用していく必要はあるというふうに考えております。また地球環境保全の側面としましては、リニューアブルな材料というところを活用していくというところと、埋め立ての処分というところも減らしていくと、そういった目標の観点があろうかということと整理してございます。

資源管理ワーキングの事務局からの説明は以上でございます。

○崎田副座長 それでは、崎田のほうから審議の状況を御報告させていただきます。

まず6ページですけれども、最初に、飲食の具体的なところの検討に入ったというのは、実は組織委員会のほうから、施設整備に影響が出る可能性のある分野を、少し先に検討してほしいというお話もありまして、飲食提供に関わるところの食器のリユース、リサイクル、あるいは食品ロス削減などについて、かなり突っ込んだ意見交換を2度ほどさせていただきました。その後、全体スキームに関して意見交換をさせていただいたんですけれども、先に細かい具体的な点を話し合ったことで、現実を実施するときに、どういう可能性があるかという温度感を、少し見定めながら話し合いができたということもありますので、かなり全体目標に関しての話は順調に進んだかなという感じがいたします。

7ページのところを見ていただければと思うんですが、方向性のゴールですけれども、やはり今、温暖化の分野も、脱炭素という大きな世界的な動きの中でしっかりとした目標を立てるという話がありました。この資源の分野でも、やはり資源を効率的に活用することの大事さが、G7など話し合いの中で非常に大きな目標、課題になってきているという世界的な変化の中で、また、国連のSDGsの中でもかなり明確に言われてきている中で、どこまで、この国際的なイベントが資源管理のところでもきちんと目標を立てて実施できるかというのが、大変重要ではないかという意欲的な御意見も多く出て、話し合いを進めてまいりました。この7ページ目のところに書いてありますように、例えばSDGs目標12の「持続可能な消費と生産」のような形で、世界に通用する明確な目標を出したほうがいいんじゃないか、あるいは、今サーキュラーエコノミーというような言い方で、世界的な動きが出てきていますので、そういう目標もいいんじゃないか、いろんな話し合いをいたしました。けれども、やはり日本の中でもしっかりと定着し、東京2020大会をきっかけにして、方向性を見定めて、持続可能な循環型社会を構築していくような、レガシーとして実現させるためにも、日本の中でも明確に伝わりやすく共感を得られるような、そういう発信をしていったほうがいいのではないかという意見も出ました。普段、ごみを減らしていく方向性を強調する際、ごみゼロという言葉は私たちが使います。それでもいいのではないかとはいふうにも思いますが、その言葉が、資源よりごみを減らすということに直結するような印象が大変強くなるということで、資源管理から始まるライフサイクル全体に関しての考え方として、世界的に使われているゼロウェイストという、この言葉を使っていたらどうかとなりました。特にゼロウェイストというのは、立候補ファイルでも使っておられるということもありますので、世界にも国内にもやはり通用するんじゃないか。た

だし、そこをゼロウェイティングという言い方で少し意味を広げていく、あるいは、その現実感があるような動きも入れてくような形で明示してはどうかというような提案が出ておりました、今回ゼロウェイティングと書かせていただいています。また、この辺は、最終決定するまでの間に、いろいろと御意見もいただければ、うれしく思っております。

それを、次に細かくどういうふうに目標設定するのかということに関しては、今、8ページの分野について議論を重ねております。日本で3Rの優先順位の重要性が強く言われておりますけれども、特に3Rの最初のリデュースのところは、廃棄物を減らすというだけではない、資源の活用をいかに有効にするかというところを明確にするのがリデュースの位置づけなわけですが、この右側の目標候補を見ていただければ、ここに今、1番～10番まで出ておりますけれども、この辺をしっかりと目標立てして、そこに指標を入れていくという形がいいのではないかとということで、今検討が進んでいます。先ほど御説明がありましたように、食品ロス削減、容器包装削減のところから始まって、調達物品のリユース、既存施設も活用するとか、リデュース・リユースは、施設整備のところと、運営と、両方に関してしっかり入っていくようにしていければというふうに思っております。また、再生材の利用も重要で、都市鉱山活用による入賞メダルづくりとか、いろいろな実際に動いていることなどもしっかりと入れて発信力が強くなればと願っています。なお、一番下の地球環境保全の側面のところですね、CO2削減の目標などをどういうふうに、この資源管理のほうで入れ込んでいくかというのも、今後検討する課題になるのではないかとというふうに、内部で話をしております。

よろしく願いいたします。

○高座長 ありがとうございます。

ただいま、気候変動ワーキンググループと、それから資源管理ワーキンググループにおいて、主要なテーマのゴール及び個別目標についての議論がなされて、一定の方向性が示されたという、こういう説明をいただきました。

これ以外にも、御存じのとおり、三つの課題がございまして、これにつきましては、事務局のほうで考え方を整理されておりますので、まずその説明を聞きまして、その上で、今御説明いただきました気候変動と資源管理と合わせて、五つの問題に関して、皆さん方の御意見をいただきたく思います。

それでは事務局、お願いします。



○林持続可能性企画課長 それでは、9ページをおめくりください。この9ページですけれども、先ほど御説明をいただいた気候変動、資源管理、左肩のほうに各主要テーマと書いております。左肩に主要テーマを書きながら、真ん中のところに大目標（ゴール）を記載させていただいて、右端の列のところには、それに向けた個別目標という形で記載をさせていただいております。気候変動、資源管理は先ほど御報告があったようなことを記載させていただいております。その下のところ、大気・水・緑・生物多様性のところから御説明をさせていただければと思います。

まず、この大気・水・緑・生物多様性のところなんですけど、大目標（ゴール）といたしまして、既存の施設や緑地・水辺等の空間の最大限の活用や、大気・水・土壌環境への環境負荷の最小化、生態系に配慮した緑化の推進等により、快適さとレジリエンスを向上させる都市システムの創出を目指すとさせていただいております。この大目標に向けた主な個別目標ということなんですけれども、水の循環利用等による環境負荷の最小化であったり、会場周辺における在来種に配慮した緑地整備、また調達段階における生物多様性等への配慮など、さまざまなものがあるかと思うんですが、こういったものを列記させていただいております。

続いて、人権・労働・公正な事業慣行等というところなんですけども、「人種や国籍、性別、性的指向、障害の有無等による差別等がなく、児童労働や強制労働、過重労働を間接的にも助長しない大会、かつ公正な事業慣行が確保された大会を目指す。」とさせていただいております。それに向けた主な個別目標ですけれども、人権や労働等に配慮した調達の実施、また公正な事業慣行の確保に向けた研修等諸施策の適切な実施が挙げられるかと思っております。

続きまして、参画・協働・情報発信ですが、持続可能性への配慮の最大化に向け、大会関係者のみならず、広く国民及び事業者、自治体等の参加・協働による取組の広範な実施と情報発信を目指すさせていただいております。それに向けた個別目標ですが、「大会関係者のみならず広く国民及び事業者、自治体等の参加による取組の実施」ということで、この辺は具体的な参画プログラムとか、そういったものが、どう実施していくのかという形が目標になってくるかと思っております。加えて、国内外への適切かつ十分な情報発信ということになってくるかと思っております。

なお、すみません、本日、この人権・労働のところに関しまして、土井先生からコメントをいただいております。

一番下から二つ目のところに参考資料7と記載されているものがございます。こちらのほう、議論の前に簡単に読み上げ、全部でなく、かいつまんで読み上げをさせていただきます。

参考資料7、運営計画の人権部分についての意見、ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表、土井香苗。

まず、五輪の理念とはというところで、五輪憲章は、スポーツをすることは人権の一つであると定めるとともに、人間の尊厳、報道の自由、差別の禁止（原則6）などを定めていると。

ただ、現実というところですけども、過去大会において、過去、外国人労働者の虐待、市民社会や活動家の弾圧、ジャーナリストへの嫌がらせなど、MSEと書いてあるんですけど、これはメジャースポーツイベントの略ですけども、こういったメジャースポーツイベントに関連して、深刻な人権侵害が起きたことを明らかにしてきたと。

そういった中で、世界が動き出したというところなんですけども、オリンピック・アジェンダ2020は、開催都市契約の条項に、世界人権宣言を基にした五輪憲章の根本原則第6項に関するものなどを盛り込むよう求めましたと。また、メジャースポーツイベントの改革を進めようとメガスポーツイベントプラットフォームという組織も設立されました。

最後の段落のところになります。そして、ビジネスと人権を取り巻くグローバルな環境も、この5年で大きく変わり、2011年に国連で、ビジネスと人権に関する指導原則が採択されてきました。また、この人権の「保護、尊重、救済」のフレームワークを定めた国連指導原則の遵守は、今や五輪の開催都市契約の人権条項として明示されるまでになりました。人権尊重の五輪であることは、契約上の義務にまでなったということです。国連指導原則を守らなければ、五輪開催をキャンセルされる可能性もあるという契約上の義務が課されるのは2024年の五輪大会からですが、東京大会が指導原則に違反することは事実上許されないと考えてます。先進国でもあり、おもてなしの国・日本であるからこそ、世界に先駆けて、自主的に国連の、この指導原則をしっかりと守ると宣言し、未来の五輪に規範を示し、レガシーを立てるべきではないでしょうか。最後のところ、東京五輪への期待なんですけど、人権尊重五輪に向けた青写真を描くのが運営計画です。人権を守ると宣言し、世界の期待に応える戦略の策定が期待されます。人権デューデリジェンスとグリーンバンスメカニズムは、その中核であるべきです。1964年五輪で、世界への堂々たる復帰を印象

づけた日本。2020年は、人権五輪の範を世界に示すチャンスです。東京がハードルを上げれば、悲惨な人権侵害を引き起こさないメジャースポーツイベントに向けた、世界にレガシーを残すことになると考えています。

以上です。

○高座長 今読み上げていただいたものは、そうすると、先ほどの表で言いますと、9ページの表でいきますと、下から2番目のところの大目標と、それから個別目標のところ、こういった観点を配慮していただきたいということですね。

はい、ありがとうございます。

次のページの10はいいんですね。10ページは。

○林持続可能性企画課長 9までです。

○高座長 9まででいいですか。はい、ありがとうございました。

それでは、全ての分野、五つのテーマについて、それぞれのワーキングの考え方と、それから事務局の考え方の説明をいただきましたので、自由に御発言をお願いいたします。

どうぞ、前川委員。

○前川委員 WWFの前川と申します。今回、小西の代理で参りました。

枝廣委員のほうから4ページ、5ページの気候変動分野の大目標と、そのアプローチについてなんですけれども、枝廣委員のほうから丁寧な御説明があったんですけれども、改めてちょっと確認させていただきたいのは、そのゼロカーボンという大目標、これ非常に素晴らしいと思いますが、何が何でもカーボンをゼロにすることをやるのではなく、そこに向けて最善の努力をしていくんだという、まず、あくまでもゼロに向かっていくんだということの目標であるということと、それから、その対策に関してなんですけれども、どうしても、出てしまったカーボンをオフセット、クレジットで相殺しようということですが、これはパリ協定、国際合意に基づくルールにのっとって、クレジット購入、相殺をするんだというところの、ここの原則といいたしめようか、意識をぜひ確認させていただきたいなと思っております。

といいますのも、クレジットは、さまざまな種類がある中で、どうしてもその国際合意に基づいていない曖昧なもの、あるいはグリーンウォッシュがまざっているかもしれないものもあると聞いております。どうしても国際的な、ハイレベルな、クリーンなものを購入しようと考えたら、どうしてもコストがかかると。コストの面から、やや下回るようなものを買ってまでゴールを達成すべきかといったところについては、非常に我々として

は懸念をしております、ぜひクリーンなものを購入して、その前としては、最大限削減して、我々の2020年に向けて、あるいはそれから東京五輪をここまで達成しましたといったことを、大手を振って発信していければなと思っております。

そこで、ゼロカーボンというのは、あくまでもそこに向かっていく目標であるということ、これを改めて明記していただきたいということと、カーボンオフセットについては、パリ協定などの国際ルールに基づいて検討していく、議論していくんだということ、きちんと明記していただければと思います。

といいますのも、解釈の幅があるような書きぶりになりますと、この中では、皆さんがそういった大目標であったり、アプローチを理解されていても、今後少しずつ変わってってしまうという可能性もあるかと思っておりますので、しっかりと明記していただければなというふうに思っております。

確認と御提案です。

○高座長 ありがとうございます。

どうぞ、枝廣委員。

○枝廣委員 今言っていたことについて、私たちの議論の中からの少し補足なのですが、ゼロカーボン手段ですね。日本や世界を排出量がないゼロカーボンの世界に持っていきたい、そのための大きなきっかけ、もしくはプロセスの1過程として、東京五輪を位置づけたい、そういった意味で言うと、そのゼロカーボン手段です。ただ、やもすると手段の目的化が起こってしまって、ゼロカーボンと言ったんだから、絶対ゼロにしないといけないという、恐らくそういう力が働きかねないということを心配しています。そうしたときに、今お話があったように、何が何でもゼロにするためにちょっと信憑性に疑問がつくようなものでもかき集めて、とりあえず数字を合わせました、という形にならないように、と考えています。カーボンマネジメントの中で、東京五輪が排出するCO2を考えるときに、本当に東京五輪の中核から排出されるものもありますし、例えば直接の運営とか、一方、海外からいらっしゃるお客さんの出すCO2などはなかなか計りにくく、もちろん東京五輪のためにはあるのですが、いろんなグラデーションがあると思います。今私たちのワーキングでは、絶対に東京五輪が中核で排出するものは、きちっとしたクレジットを充てる必要があるし、そうではないものが、少し違う形でも考えてもいいかなと思います。全て計算したものを、きちっとゼロにするということで、数字だけを合わせることは避けようという話をしています。ですので、この辺りは、また議論が進んだ後、皆様に

も御報告できると思いますが、ゼロカーボンと言ったからといって、何が何でも2020年の段階でゼロにするのだと、それが目的化しないようにということを、少し注意をしております。

以上です。

○高座長 ありがとうございました。

ほかはございますでしょうか。森口委員。

○森口委員 ありがとうございます。

今、低炭素のほうで議論がありましたことと少し関係することが、資源管理のほうでもありましたので、それをきっかけに発言させていただきます。

8月8日だったと思いますけど、第7回の資源管理のワーキングがありました。その議事録は既に公開されておりますので、そこで書いておりますけれども、資源管理のほうでも非常に高い目標を掲げて、その目標を達成するために、量ばかり稼いで質がおろそかになってはいけないのではないかとということで、あまりにも高過ぎる目標を立てることには慎重であったほうがいいのではないかと、そういう文脈で申し上げました。ゼロウェイストあるいはゼロウェイスティングという目標のほうからいうと、やはり廃棄物側、下流側の話が中心になっているように見えるわけですが、上流側、資源の調達のところも非常に重要な問題だと思っております。これがちょっと資源管理ワーキングだけじゃなく、調達ワーキングにも関わるところで、十分に議論がし切れないところもあるわけですが、特に今日の資料の2で申しますと、8ページ下のほうに、9.（持続可能な）再生可能（リニューアブル）資源活用（木材等）というのがございます。いわゆるリサイクル資源、再生資源とともに再生可能資源、リニューアブルなものをしっかり使っていこうという議論はあるわけですが、やはり特に輸入木材なんかに関して、かなり配慮が必要なところがあるかと思っております。

ほかの委員の方々のところにも送られているのではないかと思いますけど、ちょうど昨日、関係NGOのほうからその問題に関して、今、公開書簡で、組織委員会含め開催関係者に、公開書簡で質問を出していると、それに関してしっかりと対応するように働きかけてほしいという依頼がございましたので、この場で、このことをぜひお願いしたいと思っております。私ども委員としても、非常に懸念をしていたところがございますし、その中で、それぞれお立場があろうかと思いますが、苦情処理の窓口も開くことになっているんだけど、それがまだできていないのではないかとといった重要な指摘もありましたので、これを

ぜひ御検討いただきたいと思います。

特に、再生可能資源かつその再生と申しますか、リユースもしっかりやっぺいこうということの中で、具体的にコンクリートの型枠なんかに関して、リユースをしっかりとやっぺいこうという議論があるわけですが、リユースするもとの、じゃあそれがしっかりと認証を得たものなのかどうかということについて、ここのトレーサビリティというのは大変難しいところかと思ひますし、これ、基準なり定める段階でも議論があつたかと思ひますけども、そういったところが抜け道になるということで、非常にまずいのではないかと。つまり、いわゆる3R、リデュース・リユース・リサイクルをするということと、それをやっぺいければ、もとのところの再生可能資源が、必ずしも持続可能性が確認されていてもいいということにはならない。そこがある種のグリーン・ウォッシュ的になってはいけない。非常に重要なところかと思ひますので、ぜひこの点は軽視せずに、しっかりと対応していただきたいと思ひます。

○高座長 はい、どうぞ。枝廣委員。

○枝廣委員 ありがとうございます。

森口委員のおっしゃったこととも重なる点なのですが、9ページには、主要テーマが五つあります。間違いなく、ワーキンググループが作られ、議論しているものは進んでいます。気候変動、資源管理そして調達、これに関しては進んでいますが、ワーキングがないものについて少し心配しております。また先ほど土井先生からのお話がありましたが、人権もきちっと委員なりワーキングが対応しているところはいいですが、大気・水・緑・生物多様性のところがちょっと弱いと思うのと、ちゃんと議論してるのか、ということが一つあります。

もう一つは、私もとても懸念しているのが、一番下の参画・協働のところですが、前から言っていますが、今日も言わせていただくと、このエンゲージメントのところは、今の体制だととても弱いと思ひています。恐らく組織委員会的に、エンゲージメントと言ったときに、組織委員会がつくるプラットフォーム、例えば参画プログラムとか、それを提供することをエンゲージメントだと思ひますが、それはエンゲージメントの半分です。こちらのプラットフォームに乗って一緒にどうぞ、というのは、それはそれで大事ですが、一方で、木材だけではなく、例えばアニマルウェルフェアの食材についても、公開書簡や公開質問状での動きがありますので、いろいろな懸念を外部の方たちが持っているものに対し、どのように対応していくのか、ということも大事だと思ひます。往々にし

て、そういう対応はちょっと難しいとか、煩わしいとか、面倒くさいとか思われがちですが、そこで丁寧な対話をしていくことが信頼と信用をつくると思いますので、組織委員会がつくったプラットフォームに乗るか乗らないかだけではなくて、今既に来ている中には、木材の話もそうですが、私たちだけではなかなか気がついていないリスクやそれを指摘してくれているものも多々あると思いますので、こういった外からの関心、もしくは懸念に、どうきちっと答えていくかだと思います。これは今の事務局にアドホックでやってくれと言っても無理だと思うので、きちっとそういった仕組みなり、担当部署なり、担当者なり、担当プロセスを置いていただかないと、言い続けて3年たって、結局何も動かなかった、という形になるのを一番おそれています。世界的には、こうしたいろいろな懸念とか、外からの声にどう対応するかを非常によく見ているので、ないがしろにすると、あまりよくない形になってしまうのではないかな、と思っています。

そのため、これはどういうところでこれを議論すればいいのかわかりませんが、少なくとも、持続可能性に関わる外からの懸念や声に、きちっと対話をして丁寧に対応していくということをプロセスとしておつくりいただきたいと思います。

○高座長 ありがとうございます。

では、崎田委員。

○崎田副座長 ありがとうございます。

2点ほどお話をしたいんですけども、まず自分が参加をした資源管理ではないところで、気候変動のところですが、先ほど、目標ありきになってしまっていて、いわゆるカーボンオフセットなどを無理にというような流れにならないようにという御意見もありました。資源管理のところでは、もちろん資源管理WGだけが議論したわけではないですが、レガシー提案などの中から、都市鉱山をしっかりと活用して入賞メダルをつくるという、こういうプロジェクトを実現させたわけですけども、こういう国民全体が参加をするという仕組みは、やはりこのオリンピック・パラリンピックというのが社会の中できちんとした評価を得ていくというためにも大変大事だというふうに思っています。そういう意味で、この気候変動の分野でも、国民参加型の場ができたらいいいのではないかなという印象を、かなり私自身は持っておりました。ですから、そのカーボンオフセットのことを考えるときに、世界に通用するような中核的なものと、国民参加のような、気持ちを盛り上げて気候変動対応をしっかりさせていくような部分と、何かそんなところもお考えいただいたらいいのではないかなという印象を持っておりました。よろしく願いいたします。

○高座長 ありがとうございます。

ほか、ございますか。

○小宮山委員長 大変いい発言ですが、具体策を述べてもらえますか。

○崎田副座長 具体策としては、よく、今、何というんですか、クラウドファンディングみたいな、そういうような仕組みがあれば。

○小宮山委員長 そうですね。僕もそう思います。

○崎田副座長 そうですね、地域でも、そういう経済の仕組みをつくって、環境まちづくりする動きが結構広がってまして、そういうことを実際にやってるまちというのは、かなり増えてきていると思いますので、そういう手法を活用すればいいのではないかなというふうに思っています。

○高座長 枝廣委員、どうぞ。

○枝廣委員 ありがとうございます。

今、崎田委員から言ってくださったこと、本当に大事なことだと思っていて、私たちのワーキングの中でも、かなりいろいろと議論をしています。というのは、先ほど申し上げたように、東京五輪がゴールではなくて、それは一つのきっかけとして、日本社会全体が脱炭素型にいくことが私たちの目指していることです。そこでの議論を少しだけ共有させていただくと、例えば自治体で森林管理をします、もしくはボイラーを変えます、そこでCO2がクレジットとして出ますが、それは、ある程度検証できているものもあります。そういったものを例えば寄附していただくとか、いろいろなところに一緒にやっていただくというのが、一つあり得ると思います。

一方で、一人一人の例えば省エネとか、省エネ家電に買い替えることでのCO2の削減量を、それをある程度計測して、それを検証するのは難しいと思いますが、計測して、集めて、観客のCO2にオフセットに使うとか、そういうこともいろいろ考えています。ただ、集めたり、検証するところのコストが非常にかかってしまうのと、仕組みをつくらないといけないということ、また先ほど言った、あまり検証できていないものを、国際的にクレジットとして使うことは、恐らくあまりよくないことなので、あくまで国民の低炭素行動、もしくは脱炭素行動を促すきっかけとして使っていくには、どういう枠組みがいいのかということは議論しています。つまり、どちらにしても、企業の取組も自治体の取組も一般の市民の取組も含めて、できるだけ東京五輪を一つのきっかけに活動していただいて、それを東京五輪に何とかつなげるような形を、今一生懸命模索しておりますので、どこかで



御報告できればと思っております。

○高座長 ありがとうございます。

そういう意味では、こう、いろいろ議論されてますけど、下の三つはワーキングがないんですよ。最後のところの参画・協働、このところに、例えば組織単位で、例えば大学とか、組織単位で電気の使用量を幾ら減らすとか、こういったものであれば、かなり信頼性が高いですよ。数字が残りますのでね。こういう参画もあっていいような気がするんですけどね。国民的な運動にしていくためにはですね。今、御指摘いただいたように、下のところにワーキングがないというので、この設置は、ぜひ今後考えてください。

それと同時に、それぞれの連携ですよ。気候変動とか資源管理の具体的なターゲットが見えるんだったら、その参画型で、これを推進してくという方法が十分にあり得ると思いますので、今後ぜひ議論していただければというふうに思います。

ほかに何か、意見はございますでしょうか。

それでは、先に進ませていただきます。

各主要テーマのキーワード化、これが次のページですね。これにつきまして、事務局から説明をお願いいたします。

○林持続可能性企画課長 それでは、10ページ目をおめくりください。参考として資料を掲載させていただきました。趣旨は、先ほど御報告いただいております気候変動、資源管理の両ワーキングで、ゼロカーボン、ゼロウェイティングというキーワード的なものをいただいております。そういったところから、ちょっとこのペーパーを整理させていただいております。そういったところから、ちょっとこのペーパーを整理させていただいております。今日は、ざっくりばらんに先生方に御意見をいただきたいと思って用意させていただきました。

主要テーマ5分野に関して、気候変動、資源管理がゼロとなったときに、大気・水・緑・生物多様性、参加・協働、人権・労働、この辺が、どういう形で置いていくのか、先ほど9ページにありましたような、定性的な目標になってしまうというところもありますが、そういったものを受けたときに、どういう打ち出し方があるかというところを、ちょっと私ども持続可能性部で、ない知恵を絞ってですね、ちょっと書かせていただいたのが、例えば、大気・水・緑であれば、自然共生というのが、はまるのではないかと。その共生というところで考えたときに、参加・協働も、全体間で参加していく、共生していくという言葉がはまってくるのではないかと、一方で人権・労働・公正な事業慣行という、少々共生というところよりは、むしろガバナンス的という言葉のほうが、はまるのではない

かというところで、キーワード的に整理すると、三つのキーワード、「ゼロ・共生・ガバナンス」という言い方も考えられるのではないかと。

小宮山委員長からいただいております、人類が希求する持続可能性社会、この社会の道筋を目指すと言ったときに、東京大会で何ができるか、そこをワンワードではないんですけども、集めていくと、こういう「2つのゼロ+2つの共生&ガバナンス」というような言い方も考えられるなどと思っております、今後、事務局でも検討していきたいと思っておりますけども、ぜひ、今日このDGの場でも先生方から御意見をいただければなどと思っております。

なお、11ページ目は、それに関連してちょっと図式化しただけのものです。特に意味があるというものではないんですけども、例えば環境と社会とガバナンスというのを、図式的にしていくと、例えば負荷削減、資源管理とか低炭素、自然共生というのはもちろん環境的などころではあるんですけども、社会的な側面も関係してたり、さらには、そういったものをガバナンス的に下支えしていく、そんな絵の描き方もあろうかなという感じで資料をまとめました。

以上でございます。

○高座長 ありがとうございます。

今、資料の10ページ、11ページについて、事務局の案というか、たたき台をいただいたんですけども、御自由に意見をいただければというふうに思います。

どうぞ、中村委員。

○中村委員 海の研究をしておりますので、その観点から、大気・水・緑・生物多様性、非常に気になるところでございまして、自然共生という非常に大きなキーワード、これは大変結構だと思いますが、具体的な、例えば9ページに書いてある大目標であるとか、さらに個別目標の中に、少し海の視点が全くないように見えるのは、ちょっと残念かなというふうに思います。

東京というまちが、海、目の前の、東京湾の非常に豊かな恵みを享受して、そこで江戸前であるとか、あるいは最近ですと、もう少し広い概念の里海であるとかという言葉が、かなり日本初のオリジナリティーのある言葉として発信できる要素があるんじゃないかなというふうに思っております。この気候変動とか資源管理、それぞれどちらかというところと世界のすう勢を追いかけ、さらにその先をというところがあるのに対して、東京湾というものをうまくキーワードに入れて、日本オリジナリティーのある発信を、ここを出していた

だけのような努力を考えていただけないかなと。それが、例えば江戸前であるとか、里海であるとかという概念ではないかなというふうに、私は思っております。

前の東京オリンピックのときの64年、その前の年まで、実は、大森の海でのりがとれたりということがありまして、漁業権の放棄が63年ぐらいだったというふうに思います。残念ながら、前の東京オリンピックをきっかけということではないんですけども、その後で、海への触れ合いがかなり減ってしまいました。今度のオリンピックを契機に、そういう海の享受をさらに思い出し、復活させ、豊かにつき合うという、そういうオリンピックを契機にさせていただけるような、そういう目標ができないかなというふうに思っておるところでございます。

以上です。

○高座長 ありがとうございます。

ほかに意見はございますか。

すみません。どうぞ。

○枝廣委員 キーワードを拝見してつくづく、ワーキングがないところは突き詰めて考えていないので、通り一遍の言葉になってしまうのだな、ということを思いました。すみません。厳しい言い方で。

でも、自然共生とか人間共生とかガバナンスは当たり前なので、これをやらないと言ったらびっくりしますが、やると言っても別に誰もびっくりしないので、今から時間がどれぐらいあるのかわかりませんが、中村先生のように、例えば自然もしくはエンゲージメントや人権のところなどで委員の中でサブでもつくって、少し突き詰めて考えたほうがいいのではないのでしょうか。

言葉でESGなどどまとめることは、もちろんできると思いますが、世界に打ち出すには、何かあまりにも当たり前すぎると思っております。特にゼロカーボンとかゼロウェイスティングというのは、突き詰めて考えた結果出していることなので、少なくともそれとバランスするようなことが、この三つから出てきてほしいな、と思います。

○高座長 ありがとうございます。

どうぞ砂田委員。

○砂田施設担当部長 オリピック・パラリンピック準備局の砂田と申します。よろしくお願ひします。

中村委員のお話をお伺いしまして、確かに会場の配置も、ヘリテッジゾーンと、あと

東京ベイゾーンと。調べますと、漁業補償の話、当時新幹線の操車場ですかね、ああいったものが、ちょうど今お話のあったところに設置されて、それが東京の発展に結びついたというようなのが1964年と。その後いろいろあって、小宮山委員長が資料で提出いただいたような経過を経て、海上公園の上にオリンピックの施設ができて、埋め立てが南のほうに進んできてるわけですが、今回の会場の配置では、海の森水上競技場が海上公園を拡大して設置されると。中村委員のお話をお伺いしていて、そういった施設配置の事実と組み合わせて、何か整理できるものがあれば、ちょっといろいろ私どものほうでも考えて、事務局のほうといろいろ調整させていただければなというふうに感じました。

以上です。

○高座長 ありがとうございます。

では崎田委員。

○崎田副座長 すみません。

既に、今お話しいただいたようなことに含まれているのではないかと思うんですけれども、私、ここ何年か東京都の港湾審議会のメンバーもやらせていただいているのですが、そこでよく御報告いただくのは、東京都の海上公園、いわゆる東京湾沿いを海上公園として、きちんと整備していくというような構想を御報告いただくんですが、その中でかなり、海上公園の整備をオリンピック・パラリンピックに関連して実施するというようなことが出ているように私は記憶しています。東京都のそういう部署の皆さんとも御相談をして、新しいことというのではない、今考えておられることを、きちんと入れていただくだけで、かなりしっかりしたものができるとは思わないかというふうに感じております。

なお、多くの市民団体の方などは、今、葛西地区の湿地をラムサール湿地に、東京2020年前に登録をできないかということで、運動しているところも増えてきていて、2018年の世界の検討で通れば実現するのではないかというようなことも、聞いてますし、そういうことに関して東京都や環境省の方も非常に好意的に考えておられる流れもあるというふうに伺っていますので、この辺のところも、具体的なイメージは、情報を集めていけばできるんじゃないかと思っておりますので、少しそういう作業をしていただければありがたいなというふうに思います。

よろしく願いいたします。

○高座長 ありがとうございました。

ほかはよろしいですか。

すみません。森口委員。

○森口委員 先ほどの枝廣委員の御発言に尽きているんですけども、今日の11ページ参考2のESG、いわゆるESG投資とか、もともとこういうことはよく使われていると思うんですけど、ちょうど私自身はちょっと見逃したんですが、一昨日、NHKのクローズアップ現代でも、この辺り取り上げられていて、その中でも、このオリンピックの、先ほど私が発言した問題にも言及されていたというふうに理解をしております。そういう意味で、やはりガバナンスのところを、ちょっとどういうやり方でやるのがいいのかわかりませんが、やっぱりこのところをしっかりとやっていかなきゃいけないし、ここでのものの決め方とか、例えば議事録の公開一つにしても、かなり時間がかかったわけですけど、そういうやり方自身を、ものの決め方自身をしっかりと、ある種の新しいやり方というか、進んだやり方でやっていて、それもレガシーの一つにするべきではないかというような議論も、私はそういう発言をした覚えがあるんですけど、そういうことに関して、やっぱりここで言いつ放しになっていて、それを細かく詰める体制が十分にできていなかったということがあるかなと思います。

決して、共生のところよりも優先してくださいというようなことを申し上げるつもりはないんですけど。共生のほうは少し議論がありましたけど、ガバナンスのところを具体的にどう進めるのか、ぜひ今日、また追ってということではなくて、少し議論を深めておいたほうがいいのではないかなと思います、あえて発言をさせていただきました。

○高座長 ありがとうございます。

ちょっと、整理させていただいていいですか。

先ほどの大気・水・緑・生物多様性のところというのは、どちらかというと、地理的にかなり限定して考えるべきだということにもなりますよね。いわゆる気候変動とか資源管理というのは、日本全体でどういう取組ができるかという話ですけども、もうちょっと東京ベイエリアを、あるいは大会の会場近辺を念頭に置いた取組だという、こういうイメージでいいんですよね。

事務局も、そういうイメージでいらっしゃるんですよね。多分そうですね。全国的にやるって話じゃないですよ。

○中村委員 構造としてはそうなると思いますが、例えば最近ブルーカーボンという言葉もあり、沿岸の整備によって、沿岸域の生物活動がCO2の吸収削減につながるという、そういうこともありますので、地域の活動が、ここでいう自然共生のさまざまな取組が、1

番のゼロカーボン、そちらのほうにもリンクするし、いろんなところに波及すると思います。

○高座長 わかりました。

今、そのような発言をさせていただいたのは、仮にここのテーマで、ワーキングをつくるとしたら、やっぱり焦点を絞らないと、なかなかできないなと思ひまして、もし東京ベイエリアを念頭に置きながらやるということになれば、東京都の方にもかなりコミットしてもらって、具体的なターゲットなんかもできるんじゃないかなというふうに思ひました。

今後、検討してください。

その上で、そのワーキングが考えるキーワードみたいなものを出してもらおうというのが一つの方法かなというふうに思ひます。

それから、森口委員のほうから、ガバナンスの議論はもっとしっかり議論しろということですけども、具体的に何らかの指標を置きながら、これを徹底していくとなると、どういうアプローチがあるか、御意見をもらえませんか。

例えば、リオの場合は、ガバナンスはほとんど効いてなかったような状況じゃないかなと思うんですよ。後で贈収賄という問題が多数出てきたためです。日本では、そんなことは、ほとんどないと思うんですけども、例えば、そういったものは一切なかったということを開催終了後に出せば、大きな成果という話にもなるわけですね。ただ我々にとっては、そんな数字を出したところで、大したことではないと思ひます

そうすると、ガバナンス、どれだけ情報開示が進んだかという指標を考えると、そういう視点でよろしいんでしょうかね。ここをやるとしたら。

既に公開でやっている、森口委員にいろいろアドバイスをいただいて、かなりオープンにやっているつもりなんですけども、これ自身を何らかの指標にしていくべきだということで、理解したらいいですか。

○森口委員 もちろん、公開性の話もあると思ひますけれども、先ほど枝廣委員もおっしゃったように、もっとやっぱり、いろんな方の声に耳を傾けていくべきではないかと。

ですから、そのガバナンスに関して、どういうところが不足しているかということ、我々自身も気づいていないところもあると思ひますので、むしろそういったことを、このプロセスを見守っていただいている方々から、そういうこと自身のスキームを受けていくようなプロセスも必要ではないかなと思ひます。

○高座長 そういう意味では、グリーンバンスの仕組みというのは、なかなか明確な形は出

ていませんけども、少しずつ議論はしておりますので、その部分は担保できるんじゃないかなと、いろんな人の声をいただけるような形になるというふうに思います。

○崎田副座長 ガバナンスのことにに関してなんですけれども、例えばちょっと先のほうで申し訳ない。19ページの辺りの人権・労働・公正な事業慣行という辺りを読むと、こういうのはそれぞれの分野で、かなり組織委員会の中で話し合いとか、それぞれが進んでいる分野だというふうに思うんです。ですから、やはり、そういうものを、例えばこういう会合でしっかりと情報提供していただいて、外部委員を含めて、そういう状況を確認していただくとか、やはりそういう場をしっかりと持っていただくことで、どういうふうに進んでいるのかというのを、みんながしっかりと共有できるとか、そういうふうになっていくのではないかなという感じもしております。

ですから今、新しく、こういうそれぞれの会合を開いてくださいというより、今既に組織委員会で検討されてると思うんですが、それを私たちが共有していないということなのではないかという印象もあって発言させていただきますので、ちょっとその辺を伺えればと思います。

○高座長 ありがとうございます。

この後、説明をいただくんですね。

○崎田副座長 すみません。そうですね。

○高座長 ですから、そういう意味では、これから共有できるわけで、今説明されますか。

○田中持続可能性部長 今の19ページのほうは、また後で御説明いたしますが、ガバナンスとか、あと、あるいは枝廣委員のほうから、世界的な外からの声にどう対処するかというところも、今のところに通じるのかなと思っております。我々も外からの声を広く集める、どういう声があるのかということを集めることが課題だと思っておりまして、例えば、先週、先ほどクローズアップ現代の話が出ましたけど、ちょうどそのクローズアップ現代の取材が入った、世界の人権団体、国際的な団体が来て、どう調達コードの担保方法を確保するかとか、あるいはグリーンバンスメカニズムをどうつくっていくかというものを、国際的な人権団体からいろいろ聞かせていただいたことはございます。そういうものを通じて、我々の、外からの声に対してどう対処するかということ、うまく対応できればなと思ってはいるんですけど、それが、どう仕組みになってるかというところが、まだできてませんので、そういうところを皆さん方で、我々も含めてつくっていければなと思っております。

○小宮山委員長 ここは重要ですよ。

○高座長 そうですね。

どうぞ。

○小宮山委員長 最初から言っていることでもあるのですが、開かれたオリンピックって、一体どういうことかということ、日本は、この分野は非常に遅れてますね。上意下達で、あなた方もみんな自分でやらなくちゃいけないと考えていると思います。ここが違うわけですね。やっぱり開かれたオリンピックをみんなで作って行きましょう。いろんな国が実は困り出してるんですよ。いわばデモクラシーでね。そのときに、途上国のほうが早くいいものができるという可能性が実はあって、集中型のシステムがないから分散型のシステムが、例えばモバイルが、あつという間にアフリカに入ったといったことです。日本は、例えば女性の参加とか、どうやってみんなで議論しながら前に進むかということに関しては、完全な途上国ですね。その利点を生かして、このオリンピックをみんなで相談しながら前に進めるというやり方で、思い切ってやってみるという手は、僕はあると思います。それを、今、田中さんが言ったようなことでいいんですが、組織委員会と、そういうのが得意な方たちとで、ぜひ、やり方自体を考えてみることは意味があるように思います。

○高座長 ありがとうございます。

どうぞ。

○井上大会準備運営第一局長 ありがとうございます。

まずは、コメントいただきましてありがとうございます。そのいただいた点、非常に重要であろうかと思っています。

それと組織委員会、ここ主に持続可能性の部隊が来ていますけれども、この部隊だけが頑張っても仕方がないので、やはりこの考えというか、姿勢というのが、やっぱり組織委員会全体に広がっていかないといけないという部分があるかと思っています。

その点で、これもちょっと先になってしまいますけれども、前回も少し御議論いただきましたけれども、今12ページの、全体の構成のところの一部に、真ん中のほうにISO20121とありますけれども、これロンドン大会のときに、2012年の1という意味だと思えますけれども、できた企画ということですが、それについてギャップ分析を終えて、これから、どう取り組んでいこうという段階に入っていますけれども、こういうこと、仕組みも活用しながら、組織委員会全体で、そういう考えが浸透していくような取組、あるいは今スポンサー企業の方々ともネットワークをつくりましょうということで集まっていた



いて、持続可能性について語り合う場を持ったりしてはいますけれども、そういう一つ一つの取組ですけれども、それをやっていくとともに、先生方、御指摘いただいたように、ちゃんと発信もして、見えるようにして、それについて、また御意見いただいて、最初から我々、完璧なものではないと思いますので、御意見をいただいたり、時には叱咤いただいたりしながら、それに反論してということ、3年間これから続けていかなければいけないのかなど、そんな、今、先生方のお声をお聞きして感じたところです。

○高座長　そうですね。

今もう、計画全体の構成の話に入ってきたので、先へ進んでもよろしいですか。

森口委員、いいですか。多分、こういうマネジメントシステムを導入するということが、ガバナンスの話になるかと思うので、しかも、これでもって情報も開示されていくわけですから、ガバナンスの問題は、これで大体、対応できるんじゃないかなというふうに思っています。

それで、もう一点だけなんですけど、この組織委員会の前に準備委員会というのがあって、そこでグリーバンスの仕組み、どうやってつくるかという、かなり議論をやって、文章にしてまとめたものを、たしか出したと思うんですね。私そこで仕事をしましたので。そういったものも、1度たたき台で出してもらって、議論を今後、進めていただけたらなというふうに思います。

それでは、先に進みます。計画全体の構成について、事務局から説明をお願いします。

○林持続可能性企画課長　それでは12ページになります。御説明させていただきます。

計画全体の構成ということで、計画に盛り込むべき要素を書かせていただいています。

まず冒頭、第二版の位置づけというところを、第一版との整理で記載させていただこうと思っています。

第一版、今年の1月末に策定・公表をさせていただきましたが、中身的には各主要テーマごとに、世界的な動きから始まって、やるべき理由、狙い、さらには東京大会として進むべき方向性を記載させていただきました。

第二版におきましては、そういった方向性に基づいて、どういうゴール、方向性、目標を目指していくのか。また目標に関しては、可能な限りモニタリングして、検証できるように数値化していこうと。さらには、その数値、また全体の目標に向かってこういった施策を行っていくのか、そういったところを記載させていただくものが第二版だということ、そういった第一版と第二版との整理というのを、冒頭記載させていただきつつ、

64年大会からの歩み、公害を克服した東京で行われる大会という意義的なものもですね、二つ目に記載させていただきつつ、〇三つ目なんですけども、その上で、大会における持続可能性の配慮の基本的な考え方というところで、この部分、小宮山先生からも御提示いただいている世界観的なもの、2050年を見据えたものということで、基本的な方針として、世界の動きを見据えた大会の方向性的なものを書かせていただきながら、SDGsの活用、さらには計画全体がどこまで適用していくのかというところ。先ほどお話がありましたISOに関することと、モニタリングに関すること。さらにはそれらの計画の実現に向けた調達コードであったり、アセスメントなどのツールの活用について触れながら、四つ目なんですけども、主要テーマごとの目標と施策をしっかりと書いていくと。

さらには、この第二版のタイミング、来年の3月末になりますけれども、施設整備を初め、ある程度、この方向性を具現化するような動きも出てきております。そういった部分もしっかりと進捗状況含めて記載させていただき、また全体マネジメントという意味では、最後のポツになるんですけども、実施主体別に実際何をやっていくのかということも計画に位置づけていきたいと考えております。

以上です。

○高座長 この全体構成について、皆さんの意見をいただければいいんですか。

○林持続可能性企画課長 はい。

○高座長 この第二版というのは、一版と二版の大きな違いというのは、かなり具体的に書き込むということで理解したらよろしいですか。

○林持続可能性企画課長 そうですね。その後に、具体的施策を13ページ目以降、記載させていただいてるのですが、もし、こちらのほう先に御説明したほうがよろしければ。

○高座長 ここまで、お願いします。

○林持続可能性企画課長 はい、わかりました。では、13ページをおめくりください。

主要テーマごとの具体的施策ということで、テーマごとに記載をさせていただいています。

まず(1)候変動ということになります。気候変動に関しては、先ほど、冒頭最初に御報告がございましたが、気候変動、このマネジメント、カーボンマネジメント、さらには、カーボンフットプリントの算定を行いつつ、次に13ページ、14ページにまたぐんですけど、まずは、CO2の排出を回避していく方策として、戦略的な会場計画、これは当初、立候補時に、東京集中で、ある程度新規施設をつくるということがございましたが、なるべく既

存施設を活用していく、そういったところの戦略的な会場計画の見直しのもの、さらには、施設等における計画段階からの配慮、また物品調達時において積極的にCO2削減が図られるようなもの、例えば調達、購入するのではなくてレンタル、リースはしっかりやることによって、CO2を削減していくということも一つはあろうかと思っています。

さらには14ページなんですけども、再生可能エネルギー、我々が使うエネルギーについて、再生可能エネルギーを積極的に活用していこうということ、さらには、5)なんですけども、省エネ技術を活用することによる排出削減ということで、建物そのものの、今回、国立競技場であったり、恒久施設も何棟か建設させていただきますが、そういった中で、建物そのものの省エネ化を進めていく。CASBEEなどの評価というのもあるかと思っています。さらには、建物以外のところでも、省エネ性能の高い設備、機器を導入していく。また、エネルギー全体の管理をしっかりやっていく。さらには、物品資材の後利用をしっかりやっていくこと、循環利用をやることによりCO2削減効果もあると考えています。加えて、環境負荷の少ない輸送の推進ということで、まずは東京の公共交通機関をしっかりと活用して利用することによる負荷削減、さらには、選手関係者の移動に車を使いますが、その部分で自動車単体の対策をしっかり行っていく。加えて、負荷の少ない輸送の推進を行ったり、道路そのものの交通量対策、そういったところも挙げられると思っております。加えて、CO2以外の温室効果ガスとしまして、フロン対策なども考えられるかと思っています。そういったこの再エネの導入、省エネの推進、そういったことを行っても、なお発生してしまう、このCO2に対して、カーボンオフセットを実施させていただく。さらには、酷暑という話が結構ございますけども、そういったところで、適応策として暑さ対策をしっかり講じてく、そういったところが挙げられるかと思っております。

続きまして、15ページなんですけども、資源管理というところでいきますと、まずは重要なのが1)で調達物品・資材の「調達から使用後の再使用・再生利用・廃棄処理までの適切な把握」ということで、全体をしっかりと、かなり膨大なものを、この東京大会は調達することになるんですが、そういったものを、入り口から出口までしっかりと管理していくことが必要ではないかと考えております。

その上で、2)になります。省資源に配慮した物品等の調達ということで、例えば既存施設を活用することはもちろんですが、恒久施設の長寿命設計、さらには物品資材の調達時の配慮、これは仕様書に、例えばリサイクルしやすいような単一素材のものを購入してくとか、そういったところで配慮をしっかり行っていく。さらには、食品の関係でいき

ますと、食品ロスの削減、また、容器包装の削減、さらにはオリンピック・パラリンピックの移行の際に全体の模様がえをするんですけども、そういったところでしっかりと資源を効率的に活用していく法則を検討していくとか、そういったことが挙げられます。

続きまして、16ページ目をおめぐりいただきまして、先ほど話がありましたが、再生可能資源の活用、木材等の活用が挙げられます。さらには再生材の活用ということで、建設工事における再生材の利用であったり、大会関係者のユニフォームへのリサイクル素材の活用等々が挙げられます。さらに、3)なんですけども、使用済み物品等の循環的利用及び適正な処分としまして、再使用・再生利用というところが挙げられます。建設廃棄物の再生利用であったり、仮施設における資材の再利用、あとは食器のリユース・リサイクル、食品廃棄物の再生利用等々が挙げられます。また、焼却処理する、原料化する段階においては、熱回収・エネルギー回収を行う。さらには、しっかりと適正な処理、廃棄物の処理に当たっては、適正処理が非常に重要になりますので、そういったものをしっかりと法令に基づき行いつつ、最後に直接、今だってなかなか処分場が逼迫してるという中で、しっかりとこの原料化を図って、埋め立て回避をしていく、そういったことが挙げられると考えております。

続きまして、17ページになります。(3)水・大気・緑・生物多様性等というところですけども、大気環境・水環境等の向上ということで、大会における化学物質・大気・土壌等への配慮ということで、調達コードや各種法令等に基づく適切な資材・物品等の使用であったり、自動車の廃ガス対策等による大気環境への負荷軽減、また建設工事における周辺環境への配慮などが挙げられるかと思えます。また水関係の配慮では、雨水の導入、また、ろ過施設の導入などの循環利用というのが挙げられるかと思えます。また、都市における水環境の循環の実現というところでいきますと、皇居の外苑のお堀、この水質改善に向けた取組であったり、東京湾そのものの水質改善に向けた取組などが挙げられるかと思えます。

続きまして、18ページになります。2)生物多様性の確保というところですけども、生物多様性に配慮した資源の消費ということで、調達コードによるサプライチェーンにおける生物多様性への配慮、また競技会場の緑化というところでいきますと、既存樹木への配慮ということで、会場で、例えばよけてしまったときに、また復元、再度植樹し直すとかというような配慮であったり、緑の連続性を考慮しながら、在来種等に適した植樹、緑地整備を行うとか。また、都市公園がございましてけれども、街路樹による水と緑のネットワー

クを形成できるような形をとっていくとか、また、自然環境の再生・生物多様性の確保においては、都市公園を心に、その生物多様性に配慮したものを進めていく。また、水や緑と触れ合える憩いの空間をつくっていく、そういったことが考えられると思っています。

続きまして、19ページになります。(4)人権・労働・公正な事業慣行等になります。この部分に関して、まず調達コードの策定・運用で「ビジネスと人権に関する指導原則」の考え方を取り入れた調達コードの策定・運用、苦情処理システムも含めてそういったことを行っていくのが一つあります。また、この人権・労働の部分に関しましては、組織委員会内で、この辺のダイバーシティ的な、インクルージョン的な考え方、しっかりと共有を図るという意味で、組織委員会内での研修的な取組も行っております。また、アクセシビリティ・ガイドラインも策定して、そういったハンデを持っている方々への配慮というのを行っております。また文化・教育プログラムのなところ、参画プログラムになりますけれども、そういったところでの意識の醸成、さらには、大会施設そのもので、高齢者の方や障害者の方が利用しやすいような施設、また宗教的・文化的に配慮した料理の提供などを考えております。

続きまして、20ページ目、労働への適正な配慮方策ということで、仕事や生活の状況に応じた多様で柔軟な働き方の実現であったり、障害者の方や海外人材のスタッフの方が力を発揮できるような環境整備、研修等が中心になろうかと思っておりますけれども、そういったものを行っていく。さらには、「公正な事業慣行」等ということで、ビジネスチャンス・ナビであったり、そういったものを利用して、しっかりと取組を行っていく、そういったことが挙げられるかと思っております。

最後、めぐりまして、21ページ目になりますが、参画・協働・情報発信というところで、先ほども話が出ましたけれども、さまざまな主体との連携というところで、私どもが一般の方々に対して、連携というところで、参画プログラムというのをさせていただいております。また、それと同時に、こちらに記載がありますように、スポンサーによる持続可能性ネットワークというものをつくらせていただいております、スポンサーの皆様との連携というのを図っております。また、教育を通じた取組の推進という中では、ボランティア教育や意識向上のプログラム、これは組織委員会内で意識を高めていくということで、定期的に研修などを行わせていただいております。

さらには、この委員会でも御助言をいただいております「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」、こういった国民参加型のプロジェクト

であったり、また、大学連携で各大学とも連携をさせていただいておりますけども、そういったところでの取組などが挙げられます。また、そういったものをしっかりと、会場、施設における環境技術の情報発信と加えて、さまざまな環境関係の展示や人権関係のイベント等もございますので、そういったところで、しっかりと情報を発信していきたいと考えております。

以上のことを、運営企画第二版におきましては、具体的な取組という形で書いていく形で、記述を検討してるところでございます。

運営計画二版の全体的な構成と、概要の説明を終えさせていただきます。

ありがとうございます。

○高座長 ありがとうございます。

今、事務局のほうから、運営計画全体の構成と、それから、それぞれのテーマのところ、どういったものを書くのかということを紹介いただきましたけども、御意見はございますでしょうか。

崎田委員、どうぞ。

○崎田副座長 ありがとうございます。

これに関して、資源管理ワーキングで、いろいろな委員の方から御発言がある中で、関連していることを3点申し上げたいと思います。関係する委員もいらっしゃるの、もし何かありましたら、追加をお願いしたいと思います。

12ページを見ていただければと思うのですが、全体に関わるということで、○の三つ目に、大会における持続可能性配慮の基本的な考え方ということがありますが、ここで、資源管理のところ、いろんな委員の方から非常に強く出てくるのが、まず1点が計画の適用範囲ということで、組織委員会が直に建設する、あるいは直営するという以外にも、いろいろな施設整備とか、キャンプ地とか、いろいろあるわけですけども、どこまでこういうふう考えたものが適用されるのか、できるだけ広めていくことが大事なのではないかという考えの基に意見交換しておりますけれども、そこがあるということ。

あと、もう一つ、調達のところにしっかりと取り組んでいくことが、それぞれ低炭素や資源管理の具体化と、先ほどの人権・労働・公正な取引とか、そういうことに非常に強く関わってくるわけで、今回、それぞれの項目にかなり分散して、しっかりと書いてはいただいておりますけれども、何か、しっかりと、やはりこの調達のところを、今回変えていく検討していただいているわけですけども、そこが非常に大きな変化というか、効果につ

ながるのではないかという、そこを強調していただけたらというふうに思います。

もう一つ、最後に、特に資源管理のところは法制度とか、いろいろなところが、微妙なところが大変強くもありますので、方向性を検討するところと具体的に実践するところの、中間に、しっかりと現実の運用を、全体をコーディネートできるような、中間的な場が必要なのではないかという御意見が大変強くありますので、その辺は、ちょっと御検討いただければありがたいなというふうに思います。

○高座長 中間的な場というのは。

○崎田副座長 中間的な場というのは、やはり、その辺の専門性が高く、経験の長い方が、いわゆる運用、資源管理や廃棄物処理とか、そういうことの全体の運用、もちろん資源管理のところから始まりますが、各セクションが、きちんと取り組んでいるかどうか、あるいは全部の会場が取り組んでいるとか、そういうことをちゃんと見て、しっかりと、常に指示が出していけるような、そういうような場が、必要なのではないかという御意見が、結構、委員の方から出ております。

○高座長 わかりました。ありがとうございます。

枝廣委員。

○枝廣委員 ありがとうございます。

さきほどの議論の続きになりますが、例えば、外部からのいろいろな懸念とか、公開、もしくは公開ではなくてもいいのですが、いろいろな質問状とか書簡を通じてのいろいろな懸念などに、どう対応していくかというのは、この計画で言うと、今どこに入っているかがわからず見えなかったのですが、どこに位置づけているのでしょうか。

やはり計画の中にきちっと含めて進めていくというプロセスが大事だと思うので、その辺り、教えていただければと思います。

○高座長 いやいや、これからつくろうとしてるんですね。

○田中持続可能性部長 今の御質問だと、我々の運営計画の中では、参画・協働・情報発信のところかと思うんですけど、まだ、そこまでの仕組みという形ではできていませんので、その辺りは我々の今後の課題になるのかなと思います。

○高座長 よろしいですか。

森口委員、どうぞ。

○森口委員 先ほど崎田委員がおっしゃった、中間的な場なのか、仕組みなのか、ちょっと表現が大変難しいんですけど、これがある種の、またさっき議論になったガバナンスと

も関係するわけですよ。計画をつくったんだけど、実際に、じゃあ、どうやってそれが実践されるかということの、実践の仕組みをちゃんと担保しなければいけないので、そこをどうやっていくか。あるいは、もう実践以前に、この計画の最後を詰めるところもそうなんですけども、そのことはちょっと重ねて申し上げたいと思います。

それから、計画の中身に関するところでは、12ページで、さっき崎田委員、資源管理の座長のほうからお話のあったところで、もう一点だけ補足しますと、三つ目の○の、二つ目の黒ポツで、持続可能な開発目標の活用と主要5テーマの取組ってありますが、持続可能な開発目標は、17のゴールの下に百数十のターゲットがあり、その下にインディゲーターがあると、こういう3層構造になっているわけで、ここでもそれと似たような仕組みをとってはどうかと、資源管理のところでは、何をターゲットにしていって、どういうインディゲーターで見ていくのかという、こういう構造にしてはどうかと、こんな議論がありましたので、紹介させていただければと思います。

もう一点、多分議題の順序からいうと、やや先走ってると思うんですけど、通例ですと、説明だけして質疑が行われないことが多いかなと思いますので、資料の3、先走って恐縮です。スケジュールが書かれていて、この辺りが、先ほど来、議論がある、いろんな方の声に耳を傾けるとか、「自分たちだけでつくるんじゃないよ」と、小宮山委員長がおっしゃったことと関係するんですが、端的に見えるのは、この9月、今日、下旬なわけですが、この後、関係機関との意見調整に、随分時間をとっておられるわけですね。これ、ずっと固めていって、結構最後のところにパブコメをやる。これは非常によくあるパターンなんですけども、これは、環境アセスメントなんかとも非常に共通点があって、非常にいろんなものを固めてしまっ、もう変えられないようなところまで来てからやったって、なかなか大きな変更は無理だよ。だから、環境アセスメントもいろんな反省があって、戦略環境アセスメントより早い段階で議論していこうと、こういうふう環境問題の対応ではきたわけで。必ずしも、こういうところでは、一般的ではないかもしれませんが、より早い段階で、骨子みたいなものに関してパブコメを1回かけて、それに対して御意見をいただいて、関係機関との調整の中で、またそういうことを一緒に考えていけるような仕組みをしないと、関係機関と意見調整して、がちがちに固めてしまうと、パブコメをもらっても、もうそこから先、調整できませんと、そういう答えしか返ってない点で、お役所のプロセスでも非常によくあることなので、ぜひ、そういうことを変えていきませんかという提案です。



○小宮山委員長 今のは非常にいいですね。

私、実は今日、休眠預金をどのように使うかという内閣府の審議会のパブコメがあるので途中で退席しますが、これはまだはっきりと決まっていない中での意見聴取です。これは、確かに今、森口さんの言われたように、ガバナンスの改革の一つですよね。このオリンピックをやっていくためのガバナンスの改革の一つと捉えて、ぜひオープンにやりましょう。関係省庁やスポンサーも大事なんだろうけれども、国民がもっと大事なことは当たり前ですね。

○高座長 ありがとうございます。

ほかはよろしいですか。勝野さん。

○勝野参事官 ありがとうございます。内閣官房の勝野と申します。よろしくお願ひします。

今日の資料の12ページに計画全体の構成とあって、その○三つ目の、上から四つ目のポツに、井上さんから御説明ありましたが、ISO20121規格に則した持続可能性マネジメントシステムというのが書かれていて、これを入れたらどういうふうに、この全体がマネジメントされるのかという説明が、今日ないので、皆さんが心配されていると思うのです。先ほどキーワードで、中間的な場というお話がありましたが、この仕組みが、どういう形で、本当にワークをするようになるのかということ、もう少し見える化していただくとよいと思います。そうすれば皆さんも安心できる部分があるのか、それとも、これで足りない、カバーできない部分があるのであれば、それをどう補完する必要があるのかといったことを考えられると思ったので、コメントさせていただきました。

○高座長 ありがとうございます。

事務局から、ちょっと説明してもらっていいですか。

○田中持続可能性部長 ありがとうございます。

ISO20121は、まさに今、準備をしているところで、大体1年前ぐらいにとればいかなというところで、今検討しております。そういう中で、要点としては、我々、目標値を決めます。施策を決めます。それぞれのいわゆる運営部隊、FAと呼んでるところがあるんですけど、そういうところの目標値に対して、どう、その目標値が達成できたとか、達成できなければどういうふうにしていくかという、そのPDCAを、小さいPDCAをたくさん回して行って、あとはトップマネジメントと大きいPDCAを回していきながら、組織委員会全体として、よりよい方向に進めていくというような取組を、このISOの中で行う予定になっ

ております。

○高座長 現在、ギャップ分析をしていて、どこが足りないかとかいうところを、今、確認されてるんですね。そういう話でしたよね。

○田中持続可能性部長 はい、そうです。今、ギャップ分析をしております、そこの足りないところを、これから具体的に、本委託をかけて、しっかりと取り組んでいくと。それが終わると、今度、認証機関にお願いして、20121の審査という形になっていきます。

○高座長 今日じゃなくて結構ですけれども、勝野委員が指摘してくださったように、じゃあ、それを導入したら、どこまでできて何かできないのかとか、そこの整理も必要ですよ。1度ね。ぜひ、よろしく願いいたします。

○田中持続可能性部長 それは、そのマネジメントシステムの中で、どういうところできてないかということは明らかになってくると思いますので、そういうものは、こういうディスカッショングループの場で、しっかりと御説明させていただいて、評価いただければと思います。

○高座長 ありがとうございます。

どうぞ、前川委員。

○前川委員 ありがとうございます。資料の17ページ、18ページの、いわゆる水・大気・緑・生物多様性についてなんですけれども、先ほど前半のほうで、枝廣委員からも御指摘があったかと思うんですけれども、ここに関しては自然共生をゴール、テーマにされるということで、このような取組が書かれているわけなんですけれども、ざっと見ますと、やはり水質改善であるとか、緑地や親水公園の創造といったところが中心になっているように見受けられて、これに対して、どのような市民参加であるとか、あるいは企業の参画を巻き込みながら目標を達成していくのかといったところが少し、例えばゼロカーボンやゼロウェイスティングなどのビジョンと比べますと、少し、やはり弱いようなイメージを受けております。この先、策定スケジュールを見ましても、恐らく民間の企業であるとか、NGOであるとか、市民団体の意見を聴取して、これをつくり上げていく、ビジョンをつくり上げていくといったところが、あまりプロセスとして見えていないということで、少し、どのようなリソースであるとか、時間が限られてる中で、どのようなディスカッションが必要なのかということは、いろいろと御苦労されるかとは思いますが、NGOであるとか市民団体の意見を取り込んで、どのようにゴールをつくっていくのかという議論があってもいいのではないかなと思いました。

先ほど、崎田委員のほうからもラムサール条約の話が出ましたけれども、これ、葛西臨海公園を条約登録するのは、ただ単に保護区とするだけでもできるわけで、保護区とした後に、どのように、そこを利活用していくのかというビジョンがないと、やはり、この目標とするには少し、どうしても、ただ単にこれをやりました、事業としてこれをやりましたと言われかねないのかなというふうに感じましたので、少し、ここの生物多様性についてのディスカッションというの、もう少し検討されてもいいのではないかなというふうに思いました。

○高座長 ありがとうございます。

どうぞ、崎田委員。

○崎田副座長 申し訳ない。

ここの部分とちょっと違うんですが、これだけ言っておかないとと思って、今日、来たことが一つあります。

それは、先ほど、「決める前に意見聴取が必要だ」というふうに委員長がおっしゃった中で、開会式、閉会式に、どういう基本戦略を持つかということ、たしか組織委員会のほうで、委員みんなに呼びかけていただいて、私も文書で出しましたが、9月20日に基本方針がホームページで発表されたのを拝見すると、私も出したはずなんですけど、持続可能性に関連するような文言がほとんど出てこなくて、ほとんどじゃない、はっきりと全く出てこない。開会式、閉会式の基本戦略に、そういうことが全く出てこないというのは、やっぱり後々、世界に対しても、非常に弱い話、恥ずかしい話になりますので。もう一回、どういうふうに、そこをちゃんと具体的に提案していくかが大事なわけですが、みんな考えていくことかなというふうに思っています。

よろしくをお願いします。

○高座長 大切ですね。

○小原環境政策担当部長 東京都の、環境局の小原と申します。

水・大気・緑・生物多様性関係などが主に、今コメントさせていただきたい部分になるんですけども、大会に起因する環境負荷というものをどうやって押さえ込んでいくかという関心は、大会自体の取組として重要なことだと思っております、それと合わせて、そのホストシティの立場で大会を契機として、どういう水・緑・大気環境というものを実現していくかという関心も、この持続運営計画の中には、合わせて我々のほうから持ち込ませていただいて、取組として充実するような形に、現在やりとりをさせていただいてい

るところでございます。今までの御意見をいただいた中で、部分的には、大会の期間の間、存在する組織委員会が受け取るには、ちょっと荷の重いものも、多々あるかと思っております。そういったものは、東京都としての長期計画の中で、しっかりと位置づけて取り組んでいくものとして、現に取り組んでいるものもたくさん、先ほど崎田委員から御案内がありましたように、それぞれ、環境局だけではなくて、さまざまな局が横に横断しながら、組織委員会と一緒に盛り上げていくために協力して、いい環境でできるようにしていこうということで取り組んでいるところでございますので、ここの持続可能性に配慮した運営計画の中だけで収まらない部分もあろうかとは思いますが、ただ、そういった御意見は御意見として、我々、日ごろから都民の意見、あるいは有識者の意見を聞いてやっている中に取り込ませていただきたいと思います。

○高座長 既に、この案の中には書き込まれているんですね。

○小原環境政策担当部長 失礼しました。17ページ、18ページの中で申し上げれば、特に、○の後ろに、「都市における」と書かれているようなものの多くは、東京都が東京都の施策として、既に取り組んでいるものが入っているものがございます。例えば18ページの○、上から四つ目、都市における自然環境の再生・生物多様性の確保のところにあります、公園の生物多様性保存ですとか、緑化の推進ですとか、こういったものはもう、そのエリアがどういう生物的背景を持っているのかというものを配慮して、そこに、その木を植えるということで、その木のものを食べ物とする、ちっちゃい虫だとか、そこで繁殖することで、生物相のつながりが出るとか、そういったところまで含めて、我々は、もう既に対策として取り組んでいる部分を提供させていただいて、そうすると、今回、大会の会場エリアというのが、どういう背景のあるところに立地するので、そこでの植栽はこんなものが多いですよとか、そういうやりとりをさせていただいて具体化しようということも、例えばの例としてやっております。

○高座長 わかりました。ありがとうございました。

枝廣委員。

○枝廣委員 ありがとうございます。

先ほど、崎田委員が言ってくださったこと、強く強く支持したいと思います。

これは持続可能性のグループなので、ここで話をするのでは無理だと思うのですが、持続可能性そのものの位置づけを、組織委員会全体の中で、どうやって高めていくかということを考えないと、ここでは必要だって言っても、多分、組織委員会の中では、まだそ

の必要性が、それほどピンと来ていらっしやらないのかなと思います。なので、小宮山先生初め、組織委員会のほうで、持続可能性の位置づけを高めるためにどうしたらいいかということ、私たちもできることをやっていきたいと思います。

私も開会式、閉会式の基本コンセプトの中間報告を見たときに、持続可能性が全然ないということですが、たしかリオは、かなり開会式で気候変動を前面に出しましたよね。それがあって、次の東京で、しかもパリ協定が始まる年の東京で、開会式に何もそれが無いという。リオ以上のメッセージを出すべきです。開会式、閉会式を考えていらっしやる方々に、リオの開会式のビデオでも見ていただいて、それを上回るメッセージを出さないと、何を考えているのかと、世界からやはり問われると思うのですね。ここにいるみんなは、多分、共有している問題意識だと思いますが、ぜひこのことを考えてらっしやる方々にも、お伝えいただきたいと思います。○高座長 ありがとうございます。

ほかに御意見はございますでしょうか。よろしいですか。

そうしましたら、いろいろ御意見いただいたんですけれども、事務局のほうで検討いただきたいこととしまして、残りの三つのテーマに関しても、可能であればワーキングをつくってもらって、具体的なターゲットも練り上げていただければというのが1点あったかと思います。

それから、情報公開との関係で、グリーンバンスのメカニズムについても、議論を始めてるんですけども、もう少しペースを上げていただければというふうに思います。

これと合わせて、これは次回でも結構なんですけども、確かに、開会式とか閉会式でどういうテーマを取り上げるべきかという意見を求められた記憶が私もありまして、すみません、私は出さなかったんですけど。もし、いろんな方が出されているんだったら、それを受けて、どういう議論があっただろうか、その説明は、少なくともいただけたらありがたいですね。

それから、これは可能かどうかはわかりませんが、森口委員、それから前川委員のほうから御指摘ありました、パブコメをいただくタイミングなんですけども、例えばこの段階でも、もうちょっと文章に手を入れて、公開して、いろんな方から意見をもらうということも可能じゃないかなと思うんですけども、もし難しいようであれば、ちょっと委員の方とメールでもやりとりしていただいて、それでできたもの、粗々なもので、1回パブコメをもらうというステップもとっていいんじゃないかなというふうに思います。もちろん、皆さん方のマンパワーの問題もあるでしょうから、そこを考えて結論を出していただ

ければというふうに思います。

なかなか議論、しっかりまとめることはできませんでしたが、以上で本日の会合を終了にしたいと思っておりますけれども、よろしいでしょうか。

どうぞ、枝廣委員。

○枝廣委員 ごめんなさい。終わる前に1点だけ。

配付資料の一番下に資料番号がない資料があって、何だろうと皆さん思われてるので、一言だけ御紹介させてください。公開ブリーフィング第3回と書いてあります。これ、今日出席できなかった藤野座長が低炭素、脱炭素ワーキングのモデレーターを務められて、公開ブリーフィングがこの間行われました。小宮山委員長もずっと最後までいてくださったし、崎田さんも途中まで参加していただきました。議論の内容は、既に私たちが議論していることとかなり重なっているのですが、いろいろこうやって、関心が高い方々がいらっしゃるの、ぜひ一緒に、グリーンバンスという、苦情までいく前に、いろんな関心を共有して、それを練り上げて、一緒にやっていくようなプロセスができればと思っていますので、いろいろな声があるという一つとして、御紹介したいと思います。

ありがとうございます。

○高座長 それでは、これで全て議事は終了いたしましたので、事務局から今後の予定について、御説明をお願いいたします。

○田中持続可能性部長 いろいろ御意見、アドバイスをありがとうございました。

委員の先生方からいろんな御意見をいただきまして、そのパブコメのタイミング等がございますが、一応現時点で、組織委員会の中で検討しているスケジュール等について御説明いたします。

第二版の具体的な施策内容、目標値については、今、組織委員会の中で意見の調整をしているところでございます。今後、国等の意見調整を経た上で、計画案の審議を11月末ぐらいからワーキンググループに、順にかけさせていただきたいと思っております。年の瀬も迫ったところで誠に恐縮なんですけど、ディスカッショングループにつきましては、次回、12月15日の午前中を一つの候補として考えておりまして、日程が確定次第、改めて御連絡させていただきますので、よろしくをお願いいたします。

それと、最後になりましたが、ディスカッショングループの座長を務めていただいております高先生でございますが、業務の都合から、委員を退任したいというお話を受けております。非常に残念ではございますが、本日のディスカッショングループが最後にな

ります。

高座長におかれましては、大所高所の御意見、時には励ましのお言葉もいただきながら、ディスカッショングループの運営を進めていただいております、おかげさまで、今年1月には運営計画の第一版を発行することができましたし、あるいは調達ワーキンググループの中でも調達コードの策定に、非常に御支援いただきました。この場をかりまして、深く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

最後に一言、御挨拶いただければと思います。

○高座長 紹介いただきましたけれども、この組織委員会の仕事と、それから、その前の準備委員会の仕事もありまして、多分4年弱、仕事をさせていただいて、まだ引き続きやりたいなという気持ちはあるんですけども、実はこの9月、内閣府のほうの消費者委員会というところで仕事をやることになりまして、多分、両方できるかなと思っていたら、常勤的という立場で、かなりの時間をそっちに割かなければいけなくなりまして、大変申し訳ないんですけども、わがままを言わせていただきました。

ただ、その消費者委員会というところは、持続可能な消費社会、消費者市民がつくる持続可能な社会の構築とか、あるいは訪日外国人の消費者問題の解決とか、そういった問題にも取り組んでまいりますので、間接的ではありますが、オリンピック・パラリンピックのほうにも若干貢献ができるんじゃないかというふうに思っております。どうぞ引き続きよろしく願いいたします。

本当にお世話になりました。

○田中持続可能性部長 ありがとうございました。

それでは、本日はこれで終了したいと思います。本日は、お忙しい中、ありがとうございました。